

地域の経験や蓄積を世界に伝える

これまで中部国際センターや、東北の復興支援ユニットでの業務を通じて、国内のさまざまな地域と密接に関わってきた秋山慎太郎さん。今はその経験を生かして、防災分野で日本の地域と世界をつないでいる。

南米への憧れが国際協力のきっかけに

初めて海外とつながりを持ったのは、大学時代にアルゼンチンで南米最高峰の山に登ったことです。南米独特の空気や人にひかれ、「ここに住みたい」と思った私は、大学を休学して、コロンビアの日本国大使館で在外公館派遣員として2年間働きました。その派遣期間中、現地で記録的な大地震が起きました。すぐに日本から緊急援助隊の派遣や物資の輸送が始まり、私も空港で受け入れを手伝っている中で、現地の人からたくさん感謝の言葉を掛けられました。人のためになり、何より大好きな南米に関わることができるJICA職員になりたい。そう思った瞬間でした。

入構1年目、希望が叶い、中南米部のコロンビア担当になりました。当時は現地の治安の問題もあり、日本での研修を中心に事業を検討していました。その一つとして、帯広市と連携した土地区画整理に関する技術研修の立ち上げに携わった私は、それから6年後に偶然にもコロンビア事務所配属となり、その成果を目的にいたしました。現地では帰国した研修員が中心となっていて、日本で学んだ手法を生かした都市計画が進められていたほか、周辺4カ国を対象に加えた研修では、コロンビアがリーダーシップを発揮し、南南協力を加味した形で

展開されていました。研修後も成長を続けている彼らの姿を見られたことは、感慨深いものがありました。

地域に埋もれているノウハウを生かしたい

私にとって、今の仕事への向き合い方に影響している出来事が、4年前の東日本大震災です。震災後、私はJICA二本松の応援要員に志願し、避難所の運営をサポートしました。それからしばらくして東北支部に配属され、国際協力の経験を復興につなげる業務や、逆に、復興の取り組みを開発のヒントにしようというため、開発途上国から研修員を受け入れる業務を実施しました。農地の復旧や震災がれきの処理など、さまざまな復興の状況を視察した研修員は、さまざまな復興の状況がれきの処理など、地域が持つノウハウの素晴らしさを実感している様子でした。

JICAで仕事をしていると海外に目が向かがちになりますが、私は日本国内の地域に埋もれている数多くの経験や蓄積に目を向け、国際協力の現場に生かすことも大切だと思っています。それは以前、中部国際センターで働いていたときに、電力、水道、地域振興などの幅広い分野の研修を行う中でも感じていたことです。地域の経験や蓄積を生かすことは、途上国の人たちにとって有益であるだけでなく、住民自身がその地で培われてきたことの素晴らしさに気付



JICA地球環境部
防災グループ 防災第二チーム

秋山 慎太郎
AKIYAMA Shintaro

大学卒業後、2000年にJICAに就職。中南米部、中部国際センター、コロンビア事務所などを経験し、東日本大震災後は、東北支部で復興支援ユニットの業務を担当。昨年3月より現職。



今年3月の国連防災世界会議では、東日本大震災後に被災地での研修に参加したインドネシアの帰国研修員と再会した。

くことで、地域活性化にもつながります。被災地で行った研修の最終日、住民の方々がうれしそうなお表情を見せ、「また来てね」と研修員に声を掛けていた姿は印象的でした。

現在は地球環境部で、防災行政やコミュニケーション防災を担当しています。日本は防災分野に関しては、国、地方自治体、コミュニティといった各レベルでの取り組みがあり、災害が起きるたびに改善してきた実績があります。これまでの経験を踏まえて、まずはその日本の経験や蓄積についてよく学ぶことに力を入れています。来年度以降、新たな開発目標となる「SDGs」がターゲットですが、持続可能な開発のために、防災の視点はあらゆる分野において重要となります。これからも、途上国の課題と地域のリソースをつなぐ、橋渡しの実現を目指していきたいです。



インドネシアの国家防災庁などを対象にした能力強化プロジェクトの一環として、現地で防災訓練を実施。秋山さん(中央)はその講評を行った。